

〔ノート〕

## 江戸川放水路河口産の変形アサリ(2)

## — 特に外套膜について —

柴田松太郎\*

## I はじめに

1982年、筆者は福田芳生氏との共著論文で江戸川放水路河口産の変形アサリの硬組織について報告した。同論文において筆者らは、変形アサリの殻体は肉眼では著しく変形しているものの、変形した部分を顕微鏡で観察した限りでは、殻体形成は正常に行われていると認定されると報告した。そして、変形アサリ的外套膜上皮細胞に異常はなかったのではないかと指摘し、今後の課題の1つとして、変形アサリ的外套膜上皮細胞の観察をあげた。

その後、日本大学松戸歯学部三島弘幸氏、城西歯科大学の中原皓氏のご好意により、江戸川放水路河口産の変形アサリ的外套膜の切片作製および観察をすることが出来たのでその成果について報告し、若干の私見を除べてみたい。切片製作をご指導いただいた三島弘幸氏と、切片を観察してご意見をいただいた中原皓氏とに対し、ここに厚くお礼申しあげる次第である。

## II 標本

1982年5月9日、江戸川放水路河口において変形アサリを採取、ただちに10%中性ホルマリン液にて固定。対照標本(正常アサリ)は、1980年9月22日羽田空港付近の城南大橋付近で採取、10%中性ホルマリン液で固定したものをを用いた。変形アサリおよび正常アサリ的外套膜は、それぞれパラフィン包埋し、切片をヘマトキシリン・エオシン重染色した。

## III 観察所見(中原皓氏による)

変形アサリおよび対照標本の外套膜上皮細胞は、いずれもホルマリン液による固定の際に収縮をきたしてはいるが、両標本とも異常を全く認めない。

## IV 若干の考察

中原氏に観察していただいた結果、変形アサリ的外套膜上皮細胞に異常が認められないことが判明し、前

述したように筆者らが硬組織の観察結果から推定した結果が正しかったことが証明された。

とすると、変形アサリの殻体形式に異常を生じさせた原因はなにか。殻体形成に重要な役割をもつ外套膜の運動に異常をきたしたからではなかろうか。すなわち、外套膜の運動に関与している神経系統に異常をきたしたためではなかろうか。もし、この判断が正しければ、外套膜の運動をつかさどる神経系統が、本当に異常をきたしたかどうかを調べる必要があるし、また神経系統に異常をもたらした原因の追求をする必要がある。

そこで、現在、神経系統に異常をもたらす原因の1つとして考えられる重金属元素による汚染に焦点をしばって試料を製作中である。近々のうちに、聖マリアンナ医科大学の太田直一氏にお願いして調べていただく予定にしている。試料の分析をこころよく引きうけてくださった同氏に対して心から厚くお礼申しあげる次第である。

Matsutaro Shibata: A note on the deformed specimens of *Tapes (Amygdale) japonica* (Deshayes) collected from the mouth of drain of the river Edo (2) — Especially on the mantle —

\* 東京都立鷺ノ宮高等学校